

「教学と現代9」（海外伝道特別講座）報告：第4回

ブラジル伝道庁長・村田雄治氏 講演要旨

ブラジル伝道の歴史と現況

ブラジル伝道の歴史は日本移民の歴史と共に古い。1929年（昭和4年）には10家族が布教のために集団移住したが、その中に、やがて後に初代ブラジル伝道庁長となる大竹忠治郎氏もいた。しかし、第二次大戦の勃発により、日本とブラジルが国交を断絶して、天理教も取り締まりの対象になるなど、苦難の時代を迎えた。そうした中を、1944年（昭和19年）から4年間、練成道場の名目で教義講習所を開設、ようぼく育成を行った。

サンパウロ州のバウルー市に晴れて伝道庁が設立されたのは、戦後6年を経過した1951年（昭和26年）のことである。1962年（昭和37年）には伝道庁の現神殿が落成し、1970年（昭和45年）にはサンパウロ天理会館が開所した。その後、同会館内には天理道場や天理文庫が開設された。ブラジル政府からの公式布教認可が下りたのは、ようやく1985年（昭和60年）のことだった。

大竹庁長の出直し後、村田雄治氏が1993年（平成5年）に2代目の庁長として就任。村田氏は、1969年（昭和44年）に渡伯し、以来40年以上にわたってブラジル伝道に携わってきた。ブラジル伝道庁は2011年（平成23年）6月12日、真柱夫妻を迎え、創立60周年記念祭を執り行った。

現在、ブラジル伝道庁管内の教会数は89カ所、布教所数は315カ所ある。教人は1,611人、ようぼくは約5,500人である。

伝道庁の教化育成活動は着実な歩みを進めている。教会本部修養科と同じ資格が与えられるブラジル修養会は、1964年に伝道庁で第1回を開催して以来、昨年（2012年）までに105回開催し、受講総数も6,155人になる。村田庁長は伝道庁創立50周年から60周年の旬に「全州に布教拠点を」と打ち出し、現在では全27州のうち教会・布教所・講社がない州は3州になった。

横の布教・縦の伝道

ブラジルでは、かつてはカトリックが9割以上を占め、国教とも言われていたが、現在は6割程度になっている（それでもプロテスタントと合わせると、キリスト教が8割を超える）。日本からも戦前・戦後を通じ、多くの宗教が渡っている。

そのような中、天理教の布教伝道の進め方は、横の布教としては日本と同様、パンフレット配布や戸別訪問を中心に行われている。最近では信仰初代も増えており、ようぼく・信者の8割は日本語が分からない状況である。そこで、2011年8月より、伝道庁で毎月発行の『ジョルナル・テンリ』（天理新聞）の全ページをポルトガル語化した。この2万部を教会・布教所へ販売し、9月のにおいがけデーにはパンフレットを3万部印刷し、伝道庁で販売している。

また、天理教を紹介する一日講習会に、伝道庁から各地域に講師を派遣。信仰の進んだ人には教義講習会（5日間）、ブラジル修養会（28日間）に入らせていただくことになる。修養会はポルトガル語のほか、5名受講者があれば日本語でもスペイン語でも開催することになっているが、2010年以降は日本語

による受講者は出ていない。修了者は、おぢばに帰りおさづけの理を拝戴し、教人資格講習会へと進むことができる。

なお、教祖百年祭の頃より、ブラジルから日本への出稼ぎがブームになり、熱心な信者もこれに加わるようになって、最高期には約3,000人が日本で就労していた。そのおかげで管内のようぼく数が急増したとも考えられる。そうした人々のために、おぢばでブラジル教友の集いを開催したりしてきた。

また縦の伝道としては、教会おとまり会をはじめ、伝道庁では1月の“夏休み”の3日間、7～14歳の子どもの対象に「みちのこのつどい」を開催しているほか、12月には同年代の子弟の日本語練成会（7日間）を開いている。また、15～20歳の若者を対象にした学生生徒講習会もある。これ以外に、20年前からおぢばで開かれる「おやさと練成会」に際しては、教会長・布教所長子弟には片道旅費を援助している。

こうした修理丹精の賜物として、17歳になるのを待ちかねて、おさづけの理を拝戴する者が8割以上に上るといふ、また、毎年5名が天理教語学院日本語科へ入学し、その半数が布教師の卵をめざし「おやさとふせこみ科」及び「天理教専修科」へ進む。こうした人材育成の姿を見ると、日本語とポルトガル語の両言語で教えを理解し伝える布教師が着実に育っていることを感じるという。

現地化を目指しての今後の課題

ブラジルの教会にはそれぞれ理の親にあたる教会があり、丹精が行き届いているところとそうでないところとが出ている。現在、2世の会長は日本語を理解できるが、信者の8割はポルトガル語しか分からない状態になった。今後、親教会とのコミュニケーションをどううまく取っていくかという問題が生じている。

また、大竹庁長の時代から現在まで、教会が新しく誕生すると、祭典はおつとめ衣で勤めるよう指導している。しかし、祭典後のおつとめ衣の管理の仕方が分からず、和裁の技術がないため縫ひが出来ても修繕できないところがある。おつとめ衣に代わるものといっても、なかなか困難な状況である。

さらに、将来、ポルトガル語でおつとめを勤めなければならないという事態にならないとも限らないので、歌って踊れるポルトガル語の「みかぐらうた」も検討を進めつつある。現在、できるだけ言葉と手ぶりが合うようにして、違和感のないものが出来つつある。今の内にしっかりした翻訳をして、後世に残していかなければならないと思っている。

最後に、村田庁長は、現地の人々に刺激を与えるためにも、日本の若者が海を渡ってブラジルに布教に来てもらいたいと期待し、おやさと研究所にもそのための優秀な人材を送り出すための後方支援に協力していただきたいと希望を述べた。

（文責・金子 昭）



村田雄治伝道庁長